

## NEWSLETTER

No.14

2005年11月 9日

会長 小泉保 事務局 〒594-1198大阪府和泉市まなび野1-1 桃山学院大学 林 宅男 研究室内

TEL 0725-54-3131 (代表) FAX 0725-54-3202

[psj-havashi@kcc.zaq.ne.jp](mailto:psj-havashi@kcc.zaq.ne.jp) (林 宅男 URL: <http://wwwsoc.nil.ac.jp/psj4>)

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

★ 会員の皆様、お変わりありませんか。  
日本語用論学会Newsletter第14号をお届けします。さる10月9日に、第27回運営委員会が開かれました。この号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

## ★ 副会長挨拶

「言力」と「言語力」 児玉徳美

最近、国会周辺で「ことばの力」に関連して「言力」「言語力」という聞き慣れない用語が使われた。「言力」は小渕恵三元首相の私的諮問機関である「21世紀日本の構想」懇談会の報告書(河合隼雄,2000『日本のフロンティアは日本の中にある』)で用いられ、情報力・構想力・表現力・説明能力などをそなえたものと規定されている。その報告書は戦前の日本は軍勢力を最終手段として行使することを辞さない権力政治(パワー・ポリティクス)志向の国であり、戦後は経済活動に全力をあげる金力政治(マネー・ポリティクス)型に転換したが、今日国際関係において重要なものは言語を武器とする言力政治(ワード・ポリティクス)であるという。「言語力」という用語を盛り込んだ「文字・活字文化振興法」が超党派の国会議員の提案で2005年7月に成立した。「言語力」とは読み書きにとどまらず、調べる力や伝える力を含む幅広い能力を表すものと規定されている。この法律は読書週間初日の10月27日を「文字・活字の日」と定め、「言語力」を育てることをめざしている。子どもたちの学力低下が指摘されるなか、国語力の向上につなげ

ようとするものである。

国会議員が最近ことばが力を失いつつあることに着目し、読書力や表現力を向上させようとする企ては評価する。「言力」や「言語力」だけをとってみると、それを強化すること自体には何の異論もない。しかし「言力」が盛り込まれている報告書や「言語力」を発題した国会議員の日ごろの言語活動からみると、「言力」や「言語力」はいかにも付け焼き刃の対処療法とみえる。

「言力」を説く報告書は日本が国際競争力をもつためには日本人全員が実用英語を使いこなせるように、英語を第2公用語にしようという提案をしている。報告書は1億2千万人を超える国民にとって使用言語の変更がいかに困難であるかわかっていないし、「言力」政治への転換が日本の政治にとっていかに革命的であるかもわかっていない。国語力の低下を案じて「言語力」を唱える国会議員は自分たちが学校教育における国語教育の時間を戦前に比べて今日半減させてきたことをご存知なのであろうか。「言力」や「言語力」も大事であるが、国会内の議論で詭弁やはぐらかしがまかり通ったり不正献金を追及されて急に健忘症になるなど、社会におけることばの役割を十全にはたしていない実態を自ら改善することのほうが先決である。

言力や言語力は一朝にして身につくものではない。本来の言力や言語力は上手な話し方とか上手な聞き方とかいった技術の問題ではなく、むしろ何を表現し、何を理解するかと関連するためである。ことばの力を回復するためには言語政策や言語教育も

大事である。しかしそれ以上に重要なことはことばがもつ本来の役割との関連でことばが現実にどのように使われているかを絶えず点検確認することであろう。

### ★ 第8回大会ご案内

日本語用論学会第8回大会は、2005年12月10日(土)京都大学(吉田南キャンパス)〒606-8501京都市左京区吉田二本松町 TEL: 075-753-7531

URL: <http://www.kyoto-u.ac.jp/>

で別紙のプログラムの要領で開催されます。

今年度は、午前中にワークショップ4部屋13件、午後から研究発表5部屋20件(うち懇話4件)と午後3時45分からシンポジウム1件が予定されています。研究発表には、今年度は例年より多くの応募(32件)がありました。詳しくは、同封のプログラムをご覧ください。

★ 受付について：・現会員、新入会員、当日会員すべて、受付表にお名前、ご所属などをお書き下さい。

- ・現会員(会費未納者のみ4,000円)。
- ・新入会員(会費4,000円)。
- ・当日会員(会費：一般3,000円、学生2,000円)。
- ・受付で『予稿集2005』(ハンドアウト集)(1,000円)をご購入下さい。ワークショップ、研究発表、シンポジウムすべてのハンドアウトが掲載されております。したがって、これがないと会場には入れません。特に、午前中のワークショップから来られる方は10時前後の受付が一番混雑しますので、お早めにお越し下さい。受付は9時から開けております。

★ 懇親会(会費4,000円)。(会場：カフェレストラン「カンフォーラ」[吉田キャンパス 本部構内])

昼食は受付でランチマップをお配りします。大学近くの飲食店などをご利用下さい。なお、お弁当は手配しておりませんのでご注意ください。

学会ではホテルの紹介はいたしておりま

せんのでご了承下さい。

★ 京都大学へのアクセスにつきましては、プログラム同封のアクセスマップあるいは京都大学のホームページ(<http://www.kyoto-u.ac.jp/>)をご覧ください。

### ★ 編集委員会から

『語用論研究』(第7号)は現在編集中です。今年度は25編の投稿があり、7編が採用されました(修正を条件とする)。ほかに、昨年の第7回大会のシンポジウムの内容(「ジェンダーと語用論—記号論・エスノメソドロジー・批判的談話分析からの提言」)、書評(2篇)、海外の動向(国際語用論学会報告)が掲載される予定です。第7号は会費を納入された方(新入会員、大会へ来られなかった方も含めて)に学会当日ではなく、後ほど郵送いたします。なお、投稿時期は来年度からは次のように変更されることになりましたので、よろしく願いいたします。

投稿時期：論文は年中受け付けるが、当該年度の号の最終締め切りを8月20日(必着)とする

### ★ プロシーディング原稿募集の予告

日本語用論学会は、毎年、大会での発表論文のハンドアウトをまとめ大会当日にお渡ししておりました『予稿集』(2003年度大会までの名称は「Program & Abstracts」と)、学会誌『語用論研究』を発行してまいりました。先のニュースレター(NEWSLETTER No.13)でお知らせしましたように、本学会は、今年度より、これらに加え、新たに、毎年、大会で発表された論文をとりまとめた『プロシーディング』を大会後に発行することになりました。つきましては、大会の「研究発表」、「ワークショップ」で発表されました皆様には、以下の要領で原稿をご提出戴きますよう御願いたします。

1) 原稿枚数等：A4、横書き、研究発表は8ページ以内、ワークショップは4ページ以内(注、参考文献を含む)。写真印刷で、字数は自由。

2) 締め切り：2006年3月31日（金）必着。

3) 原稿提出方法：ワードでの添付ファイルによるメール送信と、プリントアウトしたハードコピーの郵送の両方で提出。

4) 提出先：

<メールでの送信> [yu-wei@kansai-gaidai.ac.jp](mailto:yu-wei@kansai-gaidai.ac.jp)

<郵送> 〒573-0195 大阪府枚方市穂1-10-1 関西外国語大学 余維研究室内（「日本語用論学会「プロシーディング投稿論文在中」と封筒の表に朱書きする」

5) 書式等の詳しい執筆要項は、12月の全国大会後、発表者にお知らせします。

<プロシーディング係担当：余維>

#### ★ 会費の振り込みについて

会費の振り込みにつきましては、大会当日の事務が大変混雑いたしますので、**未納の方は同封の振替用紙で11月末までにお払い下さい。**振替用紙が同封されている方は、2004年度、又は/及び、2005年度分が未納の方です。同封されていない方は、すでに納入済みです。学会の会計をご理解の上、未納の分も併せてお払い下さい。なお、行き違いがある場合は、ご容赦下さい。会費の未納が2年以上になりますと、会員の資格を失うことになっております。

#### ★ 『第2回談話会』について

2006年3月に、小泉保先生に「構造統語論要説」（テニエール）についての講演をお願いすることにしております。7月に開催しました第1回談話会が好評でしたので、引き続き開催したいと思います。日時、場所など、詳細は後ほどご連絡を差し上げます。

#### ★ 語用論関係の新刊書紹介

山岡實(2005)『分詞句の談話分析—意識の表現技法としての考察—』英宝社。

伊藤徳文(2005)『談話情報と英語構文解釈』英宝社。

野内良三(2005)『日本語修辭辞典』国書刊行会。

Chapman, S. (2005) *Paul Grice: Philosopher and Linguist*. Palgrave Macmillan.

Dancygier, B. and E. Sweetser (2005) *Mental Spaces in Grammar: Conditional Constructions*. CUP.

Dixon, R.M.W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*. OUP.

Givon, T. (2005) *Context as Other Minds: The Pragmatics Of Sociality, Cognition and Communication*. John Benjamins.

Iten, C. (2005) *Linguistic Meaning. Truth Conditions and Relevance*. Palgrave Macmillan.

Jaszczolt, K.M. (2005) *Default Semantics: Foundations of a Compositional Theory of Acts of Communication*. OUP.

安藤貞雄(2005)『現代英文法講義(Lectures on Modern English Grammar)』開拓社。

岡本芳和(2005)『話法とモダリティ—報告者の捉え方を中心に』リーベル出版。

金水敏(2005)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房。

串田秀也・定延利之・伝康晴編(2005)『活動としての文と発話（シリーズ文と発話第1巻）』ひつじ書房。

中島平三（編）(2005)『言語の事典』朝倉書店。

中園篤典(2005)『発話行為的引用論の試み—引用されたダイクシスの考察—』ひつじ書房。

東泉裕子(2005)From a Subordinate Clause to an Independent Clause.ひつじ書房。

#### ★ Forum

「言葉と心の合致」 久保 進

言語行為論では、行為における対応関係は、言葉、世界、心という三つの互いに独立した実在の間の関係として考察される。Searle(1979)は、「言葉と世界」の対応関係に関して、発語内行為の5つのタイプを導く理論的基盤とである、(1)言葉から世界への合致、(2)世界から言葉への合致、(3)（言葉から世界へと世界から言葉への）二重の

合致, (4) (言葉と世界の間の) 空の合致の, 4つでしかも4つに限られる「合致の方向」を想定している。また, 「心と世界」の対応関係は, Jaci de Sousa Melo(2002)が, Searle(1979)を発展させて, 心と世界との間に4つで, 4つに限られる対応関係をつけることに成功している。彼女は, 「信念」(命題態度)と「判断」(心的行為)は「心から世界の合致の方向」を, また, 「意図」や「願望」(命題態度)と「(自身に向けた)関与」や「試み」(心的行為)は「世界から心への合致」を, そして, 「喜び」や「悲しみ」(命題態度)と「感情表現」(心的行為)は「(心と世界との間に)空の合致の方向」を, そして, 「心の中での名付け」(心の中での宣言)が「二重の合致」に該当するとしている。では, 「言葉と心」の合致はどのようなものであろうか。私見では, やはり, 4つで, 4つに限られる合致の方向が想定できる。まず, 「言葉から心への合致」はすべての発語内行為の遂行において成り立つ合致の方向である。例えば, 言明型や宣言型の発語内行為は話者の「信念」の表明であり, 行為拘束型や行為指示型の発語内行為は, それぞれ, 発話時以降の, 自身の行動に対する「意図」を表明と聴者の行動に対する「願望」の表明である。そして, 感情表現型の発語内行為は, 個々の発語内行為に固有の心的状態の言葉による描写である。また, 「心から言葉」への合致には, 「言い過ぎました」という発話に見られるように, 話者個人が「他人に対して自身が発した言葉に対して「詫び」などの一定の気持ちを抱く(自身の発語内行為に対する発語媒介効果)」場合と, 「何て失礼な」のように, 話者が「他者の言葉に対して一定の気持ち」を抱く(他者の発語内行為が生じさせた発語媒介効果)」場合がある。また, 「言葉と心の間の二重の合致」は, 発語内行為としては, 「あっ, そうだ。」など, 「心に瞬時に出現した心象を, 即座に口に出す」場合であろう。しかし, 「言葉と心の間の空の合致」はどのような場合であろう。字義的には「心にもないことを言う」のようなケースに該当のであろうか。だとすると, すべての誠

実条件に違反する発話がこのタイプに属することになる。

#### <参考文献>

Jaci de Sousa Melo, C. (2002) Possible Directions of Fit between Mind, Language and the World. In Vanderveken, D. and S. Kubo (eds) *Essays in Speech Act Theory*: 109-117. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Searle, J. R. (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Act*. Cambridge: Cambridge University Press.

#### ★編集後記

最近, 親しくしている言語学の Book Series の編集者から, 「言語学関係, 特に, 語用論関係の書籍の売れ行きが芳しくなく, このままでは編集方針ないしは出版そのものの見直しを余儀なくさせられる可能性を出版部のほうから仄めかされた」と聞かされました。編集委員会や運営委員会で, 『語用論研究』や「研究発表」への応募論文の参考文献を見ていますと, もっと院生の皆さんに翻訳書だけでなく原典にもあたってもらいたいという気持ちが出てまいります。出版物の購入を通じて先輩の研究者を支援することは, 皆さん自身の研究の支援に繋がることであります。本屋さんのコマーシャルではありませんが, John Benjamins 社の *Pragmatics and Beyond* シリーズ (高原脩先生が編集委員) や Elsevier 社の *Current Research in the Semantics/ Pragmatics Interface* シリーズ (筆者が編集諮問委員) は定評があるシリーズです。皆さん, 語用論関係の本をもっとご購入下さい。それがひいてはこの分野の研究をより盛んにすることに繋がってまいります。

(広報委員長 久保進 記)